

## 事業の背景・目的

紀伊半島に稀産するジュロウカンアオイとホロテンナンショウは国内希少野生動植物種に指定されて以降も違法採取の恐れが高いうえ、道の整備や樹木の皆伐等による生息地破壊や生育環境の改変、さらには遷移による生育環境の悪化や食害もみられ絶滅の危機に瀕している。これらの危機を回避するためには、生息域外保全を行うとともに、播種や試験的導入等を含めた保全対策の検討が必要である。そこで本事業では、自生地調査を行い、生息域外保全等を行うために不可欠な生育環境や生活史等の基礎的な情報を収集し、あわせて、生育環境の改変や盗掘を未然に防ぐため市民の保全への関心を高めるよう普及啓発を行った。

## 事業の内容

### 事業①ジュロウカンアオイ保全事業

令和4年8月～令和5年2月の期間に、自生地にカメラを設置し、ジュロウカンアオイに害を及ぼす生物、送粉する生物を調査するとともに気温と照度を記録した。



図1：カメラ設置のようす

### 事業②ホロテンナンショウ保全事業

令和4年10月～11月の期間に自生地にカメラを設置し、ホロテンナンショウに害を及ぼす生物、送粉・種子散布する生物を調査するとともに気温を記録した。生息域外保全を行っている個体の充実を図った。



図2：食害を受けた  
ホロテンナンショウの葉

### 事業③普及啓発事業

花の文化園の利用者の目に触れるよう園内中央のロビーに本事業の様子と結果を掲示するとともにホームページに掲載し、広く普及啓発を行った。

## 得られた成果

- ・センサーカメラを用いた調査から、両種の自生地にはシカやカモシカ、サル、アナグマ、ヤマドリ等が出没することがわかったが食害や訪花、種子散布をする生物は確認されなかった。
- ・両種の自生地の気温を詳細に記録できた。
- ・ジュロウカンアオイの開花個体がみられる地点と生育が悪い地点の照度を比較することができた。
- ・ホロテンナンショウの自生地での出芽や展葉、仏炎苞が展開する時期等がわかった。
- ・生息域外保全をしているホロテンナンショウを初めて開花させることができた。  
塊茎の径は前年より2.8mm大きくなり、19.8mmに生長させることができた。
- ・以上の得られた情報は（公社）日本植物園協会が管理するサイトで協会加盟園が自由に閲覧でき、生息域外保全に利用できるようになった。



図3：花の文化園で  
始めて咲いたホロテ  
ンナンショウ